

戦後70年 悲劇ノ記憶ヲ語り継グ。

2015年、多くの尊い命が犠牲になった太平洋戦争の終戦から70年の節目を迎えました。戦争体験者が少なくなる中、二度と戦争の悲劇を繰り返させてはならないという思いを未来へつなげていくことが大切です。

築上町で戦争を体験した2人の方に当時の状況をうかがいました。



▲出征（昭和18年）死を覚悟し、国のために戦地へ出発。どんな気持ちだったのか。



▲椎田駅前、防火訓練（昭和17年）戦争が始まり、空襲による火災に備え訓練を実施。



▲西角田小学校講堂（昭和16年）米英撃滅必勝国民大会の様子。

（注）写真は平成元年に旧椎田町商工会が「古い写真上映」を開催するにあたり、町民の皆さんからご提供いただいたものです。

心に残る70年前のころー

平岡 晃治さん

（88歳／今津）

昭和18年、私が豊津中学校5年生（現育徳館）の時、校長先生から全校生徒に対して予科練の応募が勧められました。私はお国のためと志願し、念願の7つボタンの兵隊として、海軍航空隊に入隊しました。

立派な軍人になるために、奈良県では精神訓話を始めとして体力訓練等厳しい訓練を受けました。海軍は、艦上勤務が主であるため、ただ1人の不注意でも、最悪の場合は全乗員が生命の危険にさらされる恐れがあり全体責任という思想が強く厳しい訓練が続きました。その中で待ち遠しく、何よりも嬉しいのが家族との面会でした。父親と母親は一歳の妹を背負って、切符の入手も困難な時期に関わらず汽車で会いに来てくれました。

ある日、同僚は、特攻兵器「人間魚雷・回天」へ配置されました。同僚とは二度と会うことはありませんでした。私は特殊潜航艇（蛟龍＝潜水艦の名称）全長26mぐらいの5人乗りの実船の訓練を受けました。艇内の中で「俺たち

も、鋼鉄製の立派な棺桶をも

らったなあ。これで心残りはないなあ」と話し出撃命令を、今日か明日かと待っていたところ、昭和20年8月15日終戦の玉音放送を聞きました。

私の突然の帰りに、家族は驚き、とにかく無事であったと喜んでくれました。

私も米寿を迎えました。同僚への引いと、ずっと平和が続く様に戦争の悲惨さを伝え、恩返ししたいと思います。



▲出征当時の平岡さん



▲千人針…出征の無事「武運長久」を祈って一针ずつ赤い糸で布に縫いだまを作って贈ったもの。（母から平岡さんに贈られたもの）

松本 松之助さん

（78歳／上別府）

終戦の時、私は8歳で小山田小学校の3年生でした。着る物、履き物食べ物のない時代の体験は今でも心に残っています。

ラジオから「豊後水道北進中…」と放送があり20分程すると、アメリカのグラマン（戦闘機）がやって来ます。グラマンは広末の辺りから急降下し、機関銃を撃って海の上で急上昇するという具合でした。高射砲で攻撃し、砲弾の破裂で丸い煙だけが浮いていました。

爆撃が激しくなると、親戚が17人も避難してきて、2階の納屋で生活を送っていました。

また、小学校の運動場で遊んでいると、着陸しようとする2機が接触し、羽がもげてキラキラ輝きながら落下しました。上級生ついて見に行きましたが、怖くて近寄れませんでした。（下香楽に記念碑があります）

妻の家には飛行士の方々が宿泊をしており、しばらくすると南の空へ飛んで行きました。残った将棋盤や写真は今でも大切にしています。

広末には壕や通信隊が設置されていたので、ビニールはまだ発明されていなかったもので、銅線に紙を巻き何本もより合わせて錫の管に入れ、埋設されていました。（完成前に終戦を迎えました。）

昭和20年8月15日、玉音放送があり、日本は終戦を迎えました。国民は廃虚の中から立ち上がることになったのです。

戦争の記憶が失われつつある今、私達にできることは当たり前のように存在する「平和」の根底には、過去の悲惨な出来事や先人たちの悲しみ、そして努力の積み重ねがある事を認識することです。

平和への祈りをつなげていきましょう。